

# 子どもの発達的なアセスメントに役立つ心理学的理論

関水 しのぶ

教員養成課程のカリキュラムの中の教育心理学や教育相談といった科目や演習の中では、心理学的な基礎的理論や発達理論が扱われている。これらの理論は、家庭や学校で子どもをサポートする上で、その成長の度合いや様相を把握する際に役に立つ。本稿では、認知、社会性（道徳性）、自己等の複数の発達理論を取り上げ、思春期（青年期前期）までの各年齢段階の特徴をまとめる。そして、最後にこれらの発達理論の応用について述べていく。

## 1. 本稿で扱う発達理論

認知については、①ピアジェの認知発達理論（Piaget, 1966 波多野ほか訳, 1969）を扱う。次に、②社会性（道徳性）についてはピアジェ（前掲書）とコールバーグ（Kohlberg, 1969 永野訳, 1987）のそれぞれの道徳性の発達理論を、本田ほか（2010）がまとめた発達段階を扱う。さらに、自我や自己の発達については、③エリクソンの心理社会的発達理論（Erikson, 1968 岩瀬, 1973）、そして、④柏木（2015）がまとめた「自己」の発達についての著書を参照する。尚、これらの発達理論については本稿の末に添付した表にまとめたので、各年齢区分や発達段階の子どもの特徴を理解する上で、参考にして欲しい。

### 1.1. 乳児期（誕生から18か月くらい）

この時期の子どもは、認知的には頭の中でイメージを操る以前の段階である。ピアジェの発達段階でいうと『感覚運動期』であり「口と手で考える（感じる）時期」と言える。つまり、自分のイメージもそれ以前の段階であり、この時期にとっての「自己」とは、感覚運動的活動により自己の明確化や対象化がされていく『身体的自己』である。そして、自己が起こした刺激と外界からの刺激を知覚される上での違いから感じ取られる「自己知覚」であり、例えば、哺乳瓶を吸う時と自分の指を吸う時では感覚の違いから自分の身体とそうではないものを感じ覚的に捉えられていく。

また、エリクソンの発達段階では、この時期は、継続的に世話をしてくれる養育者（主に母親）との関わりを通して『基本的信頼』を獲得していく段階である。この時期の子どもは自分では何もできないため、泣いたり笑ったりすることで、養育者が何を求めているか考え、ミルクを与えたり、オムツを変えたり、あやしたり、抱いたりとする。このような、養育者との継続的な温かな関わりが重要である。このような過程を通し、養育者との

間に安定した愛着関係を築くことができると、養育者を「安全な基地」にして子どもは外界への好奇心を満たすような探索行動を積極的そして主体的に行うことができるようになる。

## 1.2. 幼児期前期 (およそ18ヶ月から2～3歳ぐらい)

この時期は、すべて養育者に世話をしてもらっていたところから身体や運動の機能の発達が進み、身辺自立、つまり、自分で歩いたり、フォークを持って食べたり、おしっこを知らせたり、パンツを一人ではいたりできるようになる。また、「自分でやるの！」と大人が手を出すと、苛々を示す、『第一反抗期』を迎える。養育者のサポートを受けながら自分の意志を伴った運動(随意運動)をコントロールすることを学ぶことで、エリクソンの発達段階の『自律性』を獲得することができる。また、鏡に映った自分の姿を自分であると認識(自己認識)できるようにもなり、他者のとの関係の中で生じる「恥」や「罪悪感」や「照れ」といった感情も生じる。

認知的な発達としては、意味のある言葉である初語(12か月前後に「マンマ」等)が見られた後に、二語文(「コレ、チョウダイ」等)、三語文(「ママ、オデカケ、イクノ?」等)がみられる時期である。ピアジェの発達段階では、頭の中でイメージ(表象)を操ること難しい段階である『感覚運動期』から、目の前にある物であれば考えることができる『前操作期』に差しかかる時期といえる。

## 1.3. 幼児期後期 (3歳から5～6歳ぐらい)

この段階では、前段階よりもさらに身体や運動の機能が成長し、大人と同じような日常会話もできるようになる。ちょうど、幼稚園に入園する年齢段階に相当し、遊びや他者との関わりを通して、自分のできることを試したり、自分から周りの環境に働きかけたりするようになる。これらの活動の中では、体や想像力を使い遊ぶことが重要である。この過程を通して、エリクソンの発達段階でいう『自発性』を獲得する。さらに、社会性の発達においては『第0段階: 欲求指向』の段階にあり、かつ、この時期の子どもにとって「正しさ」とは、「自分の欲求を通すこと」である。

認知的な発達段階としては、イメージ(表象)を頭の中で操る前の段階である『前操作期』にあり、見えた通りに考える(保存概念の未獲得)、かつ、他者の視点に立って考えることは難しい「自己中心的な視点」の特徴がみられる。このように未熟さもあるが、この時期の子どもの自発性を育てるためには、大人は子どもが適切な行動を選択できるような手助けをしてあげ、また、子どもの探索的な行動をすることを励ましてあげることが大切である。

## 1.4. 児童期 (学齢期の6～7歳から11～12歳ぐらい)

この時期は、日本では小学生の学齢期に相当する。学校で計画的な学習が始まり、他者と自分を比較しながら、自分は何か得意で苦手なのかということを知るようになる。学校や社会と関わりながら、自分の技能や能力についての自信をつけていくと、エリクソンの発達段階でいう『勤勉性』を獲得していく。

認知発達の的には、低学年(1～2年)から中学年(3～4年)の間に、具体的なもので

あれば、頭の中でイメージを操ることができ、物事の法則をみつけたり、論理的に考えたりできるようになる。さらに、高学年（5～6年）になると、具体的なものだけでなく抽象的なことも操作（思考）することができる『形式的操作期』に移行しはじめる。しかし、中学年の学習内容から抽象的な単元（算数の分数など）入ってくるため、低学年ではスムーズに学習できていた子どもが中学年になり苦戦することがある。これを「10歳の壁」と呼ぶ。

社会性的発達としては、低学年までの子どもは、『第1段階：罰と服従指向』にあり、「大人（力のあるもの）に従うこと」が正しいと考える。学校では先生の言うことを従うことが善いことと捉え、ルールやきまりを杓子定規に捉える傾向にある。しかし、中学年以降になると、『第2段階：道具的な相対主義の指向』に移行しはじめ、大人を絶対的な存在から相対的に捉えるようになる。つまり、必ずしも、大人や先生の言うことが正しいとは限らないと考えることができるようになる。この時期の子どもにとって道徳的に正しいことは、「相手がしてくれたことと同じことをすること」や「自分が損をしないこと」である。そのため、この時期になると先生の言動から不公平さや理不尽さを感じると強く反発を持つ。そして、集団の中で、自分自身の存在を認めてもらったり役に立つ経験をしたりすることで、次の段階に成長していく。その後、『第3段階：対人的同調、指向』に移行すると、道徳的には正しいことは「身近な人からよいと期待された行動をすること」と捉えるようになる。ルールについても杓子定規ではなく柔軟に使えるようになる。

以上のように、児童期の子どもは、親や先生、そして、仲間から励ましてもらったり、褒めてもらったり、認めてもらったりすることで、自分の能力を実感させ、さらに、その先の将来への自信に繋がっていくのである。しかし、このような機会に恵まれないと、自分の能力に対して疑いを持ち、その将来にも自信を持つことが難しくなる。

### 1.5. 思春期（中学生）（13歳から15歳）

この時期は、第二性徴がはじまり、身体的に成熟し男女の特徴があらわれ、さらに、親からの心理的自立しようとし始め、『第二反抗期』を迎える。性ホルモンの分泌が多くなるため、精神的にも不安定になりやすく、急激な身体的変化を戸惑う場合も多いだろう。子どもから大人になる過渡期であり、依存と自立の間を揺れ動き、大人に甘えたり反発したりを繰り返す。これが養育者にとって非常に辛いものとなることが多い。

道徳的には、児童期の高学年の子どもと同様に『第3段階：対人的同調、指向』の捉え方をする。中学生の子どもは、特に、『第二反抗期』もあり、この時期の子どもは大人の期待よりも身近な同年代の仲間の期待に沿うような行動をし、社会的ルール以上に仲間どうしの約束を優先する傾向にある。そもそも、『第3段階：対人的同調、指向』の段階では、自分たち仲間や身近な他者の配慮はできるが、それ以外の人々や社会への配慮が難しい傾向にある。

### 1.6. 思春期（高校生）（16歳以降）

道徳的な発達としては、中学生とほぼ同じ時期であるが、18歳頃には『第4段階：法と秩序指向』の段階以降に移行していく。自分の属するグループや身近な仲間を超え、社会や集団の中で、自分たちの行動がどのように捉えられるのか考えられるようになる。つま

り、自分が会ったこともない社会や国の人たちの視点に立って思考をする必要がある環境問題や国際問題については、この段階に移行する必要がある。

認知的な発達段階では、『形式的操作期』に達しており、抽象的概念について論理的な思考ができるようになる。そのため、「自分とは何者なのか」「自分は何のために生きているのか」「自分は将来どう生きていくのか」といったことも考えるようになる。エリクソンの発達段階では、『自我同一性の確立』が課題になる。しかし、現代は教育を受ける期間が長くなっているため、親から社会的自立できるようになるのは、20歳を超える人は多いため、『自我同一性の確立』を達成するまでの期間も長くなるだろう。

## 2. 子どもの発達段階の知識を応用する

本節では、上述の認知、社会、自己等の発達段階を、家庭や学校の教育に関する問題（しつけ、携帯電話、不登校）に応用し考察する。これらの各年齢段階の子どもが各発達段階に相当する成長をしているのであれば、日常生活や学校生活で適応しやすくなる。しかし、本人の生まれつきの特性や家庭環境によって、発達段階に即した成長が難しい場合は、その適応が難しくなると考えられる。認知、社会、自己等のどの部分で発達に困難があるかアセスメントすることで、その対応方法も検討することができるだろう。

### 2.1. しつけの枠組みについて

子育てをする親の悩みで、「子どもを甘やかしているのではないか」「わがママを許してしまっているのではないか」「どのような場合に叱るべきなのか、許容するべきであるのか迷う。」と話しが出てくることは多い。しかし、甘やかしかどうかの線引きに、大河原(2016)の述べる「しっかりした枠と愛情によるしつけ」を挙げながら説明する。この枠組みについて、同氏は、次の3つの点をかけあわされたものとして説明している。①社会のルール（に反するものであるかどうか）、②子どもの命と健康を守るための制限、③発達段階に即した課題であるかどうか、である。特に、③の項目を考える際に、本稿で取り上げた心理学における発達理論に照らし合わせると分かりやすいだろう。

### 2.2. 携帯電話の使用について

子どもの携帯電話等のタブレットの使用で、頭を痛める大人は多いだろう。子どもがそれを所有するメリットがあるが、一方で、デメリットもある。年齢が低ければ低いほど、危険を予測して回避することは困難であるため、大人の管理を強くするべきである。しかし、中学生になると『第二反抗期』もはじまり、大人の言うことを容易に聞かなくなる。認知的発達段階的に考えると、『形式的操作期』に達し抽象的概念を論理的に思考できるようになる。そして、携帯電話の操作が、大人よりも得意な子どもがあるだろう。しかし、社会性の発達段階から考えると『第3段階：对人的同調指向』の段階にあるが、自分の行った行為が、社会的な視点からどのような問題を起こすのか、そして、危険を回避するのかが中学生ではまだ難しい。そのため、小学生の時よりも大人の管理は厳しくしないにしても、やはり、中学生も大人の管理の下に使用する必要がある。事細かく、子どものSNSの利用に介入することは反発を生むものではあるが、危険な時に大人が介入でき

るようにするために、必要があれば大人が子どもの携帯電話の中を見ることができるような約束と関係性を作っておくことが大切である。そのため、子どもに携帯電話を与える時の約束の設定は重要である。余談であるが、このことは携帯電話ショップの窓口で相談できるので、保護者の方は利用するとよいだろう。

### 2.3. 登校しぶりや不登校について

登校しぶりや不登校の問題については、そのきっかけは色々あるだろうし、複数の問題が絡み合っていることがある。そして、どの年齢段階に起きたのか、それまでに学習面あるいは対人面の躓きはあるか、自己の発達の状態（自発性の強さ等）、身体的な状態や疾患があるのかどうかを、把握する必要がある。初期の状況に、精神的に不安定さが強く、泣き叫んだり、昏々と眠ったりする状態が続いたり、ひどい頭痛や腹痛等の体調不良の症状が現れる場合がある。そのような状態では、外出すること自体が難しいので、登校刺激は与えない方がいい時期である。それまで獲得された『自発性』や『勤勉性』を発揮することが一時的に難しくなっている状態であるとも言える。その後、自宅で、食欲も睡眠も安定し身体的に回復し、また、本人の楽しめる遊びができ、精神的にも十分に安定した時、つまり、『自発性』が回復したところで、『勤勉性』を取り戻すために、子ども自身に外出や部分的な登校（別室や放課後等）を提案するとよいだろう。また、学校に登校できない期間の学習を大人は心配するが、この『自発性』が回復していないところでは、学習も難しいことを念頭におき、焦らず、その子どもの回復を待つことが必要である。

さらに、手のかからない穏やかな子どもの中で、元々『自発性』が弱い場合もある。そのような子どもは特に、本人自ら行動することを肯定し、また、本人にとってストレスがかかる場面でそれを拒否したり、その意思を伝えたりすることを受け止めながら対応することが重要となる。

## 3. 最後に

子どもの発達は、物差しや測りで物理的に測定できるものではないため、日々の行動のエピソードのふりかえりや観察から、心理学的な発達理論や知見に照らし合わせて、その発達の度合いを推測していく必要がある。その場合、一人で把握することが難しいので、その子どもに関わる複数の大人が情報を共有しながら、その子どもの状態を把握していくことが望ましい。また、子どもの発達について詳しい医師やカウンセラーに相談しながら、その子どもの育ちの状態をアセスメントするのもよいだろう。

## [引用文献]

- Erikson, E.H. (1968). *Identity: Youth and Crisis*. W. W. Norton & Co., Inc. (エリクソン, E. H. (著) 岩瀬庸理 (訳) (1973). 青年と危機. 金沢文庫)
- 本田恵子・植山紀佐子・鈴木眞里 (編) (2010). 包括的スクールカウンセリングの理論と実践—子どもの課題の見立てとチーム連携のあり方 金子書房.
- 柏木恵子 (2015). 新装版子どもの「自己」の発達 東京大学出版会.
- Kohlberg, L. (1969). Stage and sequence: The cognitive developmental approach to socialization. In D Goslin (Ed.), *The handbook of socialization theory and research*. Rand McNally (永野重史 (監訳) (1987). 道徳性の形成—認知発達のアプローチ. 新曜社)
- 大河原美以 (著) (2016). 『子どもの「いや」に困ったとき読む本』大和書房
- Piaget, J. et al. (1966). *La Psychologie de l'Enfant*. Collection QUE SAIS-JE? No.369 (ピアジェ, J.ほか (著), 波多野完治ほか (訳) (1969). 新しい児童心理学 白水社)

表 認知・社会性・自己に関する発達段階の対応表

区分	年齢*	ピアジェによる思考の発達段階とその特徴	ピアジェおよびコールバーグによる道徳性の発達段階(本田ほか, 2010を参考)	エリクソンの心理社会的発達	「自己」の発達(柏木, 2015を参考)
乳児期	0	0~2歳 感覚運動期:口と手で考える時期		基本的信頼 対 不信任	身体的自己 ● 感覚運動的活動による自己の明確化・対象化
	1				
幼児期	2	3~6歳 前操作期:見た通りに考える時期	3~5歳 第0段階:欲求指向 ● 自分の欲求を通すことが正しい ● 視点は自己中心的	自律性 対 恥・疑惑	自己認識 ● 外面的特徴や行動から 第一反抗期 ● 身辺自立
	3				
	4		5~7歳 第1段階:罰と服従への指向 ● 権威者への絶対服従 ● ルールを拘り定規に解釈 ● 自己中心的視点を脱する	自発性 対 罪悪感	自己認識 ● 他者との比較から
	5				
	6				
児童期	7	7~10歳 具体的操作期:具体的なものを使って法則を見つけ、論理的に考え始める時期	8~11歳 第2段階:道具主義的な相対主義指向 ● 相手がしたことと等価のことをする→やられたらやり返してよいと考える	勤勉性 対 劣等感	自己概念 ● 外面的なものから内面的・認知的側面中心  自己評価 ● 他者の評価よりも甘め  第二反抗期 ● 心理的自立
	8				
	9	11~17歳 形式的操作期:抽象的概念と自由に扱い、命題、原理に挑戦する時期	11~17歳 第3段階:対人的同調、「良い子」指向 身近な人から期待された行動をする ● 相手が何をしたかではなく、自分が相手にしてほしいと思うようにしてあげべきと考える。→やられてもやりかえさない	自我同一性確立 対 自我同一性拡散	自己評価 ● 他者のまなざしが自己評価により大きく規定される傾向→自己評価が低下する時期
	10				
	11	以降、『第4段:法と秩序指向』、『第5段階:社会契約的な法律指向』、『第6段階:普遍的な倫理的原理の指向』が続く。			
12					
思春期(青年期前期)	13	11~17歳 形式的操作期:抽象的概念と自由に扱い、命題、原理に挑戦する時期	以降、『第4段:法と秩序指向』、『第5段階:社会契約的な法律指向』、『第6段階:普遍的な倫理的原理の指向』が続く。	自我同一性確立 対 自我同一性拡散	自己評価 ● 他者のまなざしが自己評価により大きく規定される傾向→自己評価が低下する時期
	14				
	15				
	16				
	17				

\*年齢区分はおおよそのもの